

特集

写真

# 沖縄言葉

石川 文洋

いしかわ ぶんよう / 1938年沖縄県那覇市生まれ。写真家。毎日映画社、香港のスタジオ、朝日新聞社勤務などを経て、現在はフリーカメラマンとして活躍。1998年ベトナム・ホーチミン市戦争証跡博物館内に「石川文洋ベトナム報道35年 戦争と平和」常設室開設。著書に「ベトナム戦争と平和」(岩波書店)、「戦場カメラマン」(朝日新聞社)などがある。

エッセイ

わたしは一九四三年、五歳のときに家族とともに沖縄から本土に移住した。それまではずっと沖縄言葉で生活していた。沖縄言葉と共通語はずいぶん違う。翌年、千葉県船橋市の小学校に入学した。子どもなので共通語にはすぐ慣れたが、それでもあやしい言葉を使ったようだ。「やわらかい」を「やはらかい」と言って先生や生徒たちに笑われたことを今でも覚えている。

わたしは次男だったが母方に養子に行くことになつていたので、中学三年生までは安里姓を名乗っていた。そういうこともあつて小学校時代は「オキナワ」というニックネームをつけられていた。沖縄生まれということに引け目は感じていなかったが、両親が沖縄言葉で話し合っているところを人に聞かれたら恥ずかしいと思つたことがある。

今は沖縄言葉は素晴らしい文化だと思つている。共通語では表現できないニュアンスを含んだ言葉が多い。わたしは本土の生活が長いので今では話すことはできないが、聞く分には八〇パーセントは理解できると思つている。沖縄言葉は喜怒哀楽を表現する点で、特に心情があらわれているように思つた。

わたしが沖縄へ帰つたときは、祖母は沖縄言葉、わたしは共通語で会話が成立していた。しかし、現在が世代が変わつて、子どもをもつ親たちも沖縄言葉が話せなくなつていく。

原因は沖縄言葉を話していたお年寄りたちが亡くなつてきたこと、共通語による学校での会話、家庭に定着したテレビの影響などによる。以前、読谷村長をしていた山内徳信さんにお会いしたとき、役場では、受付、職員の話も含め、全て沖縄言葉にしてはいかがでしょうかと提案したことがある。

父は沖縄の時代小説や芝居の脚本を書いていた。昨年一月、日本橋の三越劇場で父の作品「吾国シヨウガネ」が上演された。沖縄から公演にきた主演の大城光子さんほか、沖縄芝居の役者の方々が全て沖縄言葉で演じた。本土に住む沖縄県人会の人びとは久しぶりに沖縄芝居を楽しんだようだった。

戦前、戦後は沖縄芝居の全盛時代だった。今では、沖縄言葉で脚本を書く作家、演じる役者も少なくなつた。言葉は子ども時代に覚える。沖縄ではせめて学校生活のなかで週に二、三時間は、沖縄言葉の時間を設けることができないうかと思つている。



目次

AUGUST 2006 8  
月刊みんぱく

01 エッセイ 世界へ世界から  
沖縄言葉  
石川 文洋

02 特集 写真  
受信される記憶

港 千尋  
「華僑の故郷」の歴史表章  
韓 敬  
世界の屋根の村での撮影  
高山 龍三

03 撮影者の「立ち位置」

竹内 潔  
写真とアウラ  
久保 正敏  
スラムで生きる人  
北森 絵里

08 未来へのひらくミュージアム  
民族学とアートの融合  
ーバリの新しい博物館 ケ・ブランリーー  
大森 康宏

11 表紙モノ語り  
奇妙な楽器ーマトラカー  
山本 紀夫

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々  
「テヘランゼルス」のノウルズ  
橋原 敦子

15 時論・新論・理想論  
島嶼国の民主主義とストライキ  
須藤 健一

16 外国人として生きる  
ラジャブザーデさんの引越し  
藤元 優子

18 地球を集める  
物は町に、情報は村に  
一反比例の関係ー  
八杉 穂穂

20 生きもの博物館  
トウモロコシから生まれたマヤ文明  
青山 和夫

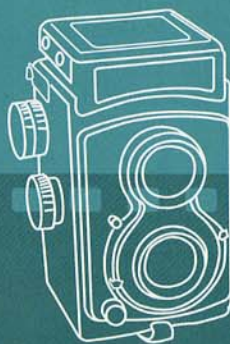
22 フィールドで考える  
ビルマで歌を学ぶ  
井上 さゆり

24 特別展  
「更紗今昔物語ージャワから世界へー」  
次号予告・編集後記

特集

# 写真

わたしたちの生活は写真であふれ、ときに写真は記憶を喚起するものとなる。探検の時代であれ、植民地の時代であれ、写真は人びとの過去の記憶を蘇らせる。フィールドで撮影した写真、フィールドで発見した写真をおし、現代のわたしたちは過去の写真から何を読みとることができるのか、考えてみたい。



## 受信される記憶

港 千尋

(みなと ちひろ)

多摩美術大学教授

## ポストカードの世界

パリに住み始めたのは一九八〇年代で、いちばん印象に残っているのは、サン・ジャック通りにあるアパルトマンである。六階建ての建物の最上階だった。一九世紀の建築で、当時もまだエレベーターはなかった。日本の七階に当たり、しかもずっと天井が高かったから、今思えば毎日よく上り下りをしていったものである。窓からの眺めが良かったのが救いだっただのかもしれないが、この住みかのことを覚えてるのは、たぶん屋根裏のせいだ。踊り場の上に梯子をかけ、小さな扉をあけて入ったそこは、自分の部屋からは想像のできない別世界だった。長いあい

だにわたって住人たちが押し込み、忘れていったモノたちがひしめいていたが、粉雪のような埃がふり積もり、何があるのか判断としない。靴箱くらいの大きさの木箱がいくつかが転がっている。舞い上がる埃を払ってあげてみると、なかにぎつり詰まったポストカードがあった。モノクローム写真が印刷されたカードで、おそらく二〇世紀初頭のものである。ヨーロッパ各地の建物や公園の写真にまじって、アフリカの写真もふくまれている。これが、それまで知らなかった、ポストカードの世界との出会いだった。

セーヌ河岸の古本屋をのぞけば、こうした古いポストカードが吊るされているのが目に入る。コレクターがいるからで、たいてい地名やテーマ別に分類されて売られている。ポストカード専門の古物商にも会ったが、彼らが扱う量は膨大である。興味をもったのは、美術館や博物館に収集されている写真や、写真集の出版とは明らかに異質の世界を感じたからであった。

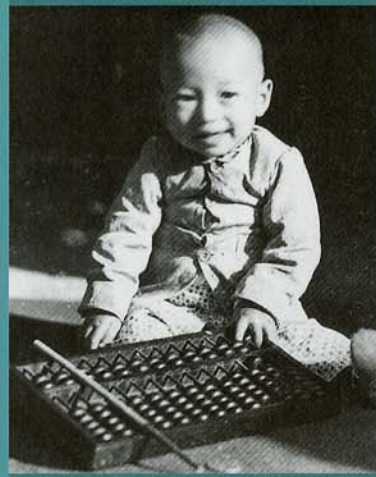
## 個人が送受信できるメディア

今日、写真家が写真をポストカードにするのは、展覧会の案内を送るときくらいであろう。しかし一九世紀末から二〇世紀前半にかけて、ポストカードはひと

つの独立したメディアだった。その量があまりに膨大であるのと、写真史のなかに体系的に位置づけられているわけではないという理由で、見過ごされてはいるが、写真の流通という点では、今日のインターネットと比較することができるほどの重要性をもっている。郵便制度の確立を背景にして爆発的に流行したポストカードは、国境を超えて飛び交う写真というイメージの世界を形成したからである。失われたときへの郷愁に彩られることもあれば、記録としての重要性を認められて一冊の写真集になることもあるが、

ポストカードの研究にとつて大切なのは、写っている被写体だけではない。写真家たちの眼差しが、送信と受信を通じて共有される。いい換えれば近代社会のなかにあらたなイメージの記憶がいかにして生まれたか。写真は、個人が送信し受信することのできるメディアとして発達してきたのだ。匿名の眼差しが共有され、ある時代の記憶となつてゆく、そのプロセスを知るとは、ケータイ写真の時代に生きるわたしたちにとつても、十分に意味をもっていると思う。





1歳の男子。算盤と筆に、学問のある商人になるようにという親の期待が込められている(1944年)



和順郷の益群中学校のOBと村人が1943年、郭沫若によって改編された新劇「孔雀胆」を上演(1948年)



寸樹生氏がミャンマーの華僑へ募金を募り、1940年、故郷の和順郷に雲南初の華僑学校「益群学校」を創設。その中学校第1班の学生たちの集合写真(1940年)

撮影は張溶氏

## 「華僑の故郷」の歴史表象

韓 敏  
(かんびん)

本館民族社会研究部

僑の故郷としての和順郷の歴史をリアルに記録している。数百枚の写真の多くは、わたしのインターネット(資料・情報提供者であった張李仲氏の父親の張溶氏が撮ったものである。張溶氏は一九二〇年代の初期に和順郷に移住してきて、一九二七年に和順郷で初めての写真館「耀光攝影室」を開いた。現在、その写真館は「僑光照像館」という名前に変更され、張溶氏の六〇歳過ぎの娘二人によって運営されている。

和順郷の人びとは、これらの古い写真を大切に家に飾っており、写真に記録されている彼らの祖先が作った和順郷の歴史を誇りに思っている。近年、彼らは和順郷の観光スポットで古い写真展を開催し、写真をとおして観光客に「華僑の故郷」の歴史を語っている。こうして二一世紀の観光産業化のもと、古い写真は和順郷の人びとにとって自分たちの郷土の歴史と文化を表象する手段のひとつとなっている。

「僑光照像館」のオーナーの話によると、古い写真は和順郷在住の人びとだけの宝物ではなく、一時帰国の華人華僑や観光客もよくそれらを客土産として買って帰るそうである。観光客たちは古い写真をとおして二〇世紀の初頭における中国農村の近代化のリアリティを想像する。海外にいる華人華僑たちにとっては、和順郷の古い写真は彼らの家族、故郷への想いと記憶を具現化するものであり、彼らのアイデンティティの確立の媒介でもあるといえよう。

## 世界の屋根の村での撮影

高山 龍三

(たかやま りゅうぞう)

日本ネパール協会関西支部長

ろいろなことを教えてくれた。チベット人社会における「骨と肉」のシステムを見つけたのも、彼のおかげだ。彼と兄さんで、一人の奥さんをもっている。「妻多夫」のことも聞いた。

チベット人村の住み込み調査も、初めから順調に進んだのではない。まずことばが通じない。初めはもっぱら耳をならすこと

にし、それより目を使つての仕事を進めていった。すなわち写真で、一軒一軒の家、村人の顔、家畜圍い、農地、寺を撮つていった。もちろん行事や作業があるとそこに駆けつけ、写真に撮るとともに、聞き取りをした。そして家の配置と集落の地図を作り、家族関係を聞き、それをまとめて、全家族の系図を作った。その結果、村の人口も、社会シ

民博データベースとして、一九五八年わたしたちが撮ったヒマラヤの写真がネット上に公開された。ひじょうにうまく構成されていて、研究者のみならず一般の方も興味をもって見ていただけるのではないかとと思う。地図上でネパールのツアルカ村をクリックすると、いくつかのテーマが出る。「人物」を押してみると、そこに懐かしいチベット人の顔が並んでいる。この村は民族調査のために、わたしたちが三カ月住みこんだ村だ。高さはもっていった高度計で四二五〇メートル。おそろしくこの辺でもっとも高い定住村と思う。農耕限界ぎりぎりの高さでオオムギの単作をしていた。しかし生業の主力は牧畜とキャラバン交易であった。というよりその三つの生業をうまく組み合わせて、この厳しい環境に生きてきたのである。

データベースのサイト  
<http://www.minpaku.ac.jp/Nepal/>

民博データベース画面

チベット人はいつも手に糸紡ぎをもって糸を紡いでいる。石壁造りの家の屋根には薪が積まれている



ボン教の僧侶による仮面踊りで、村の悪魔封じ



### 撮影後記

わたしのカメラはカラーとモノクロの2台あり、モノクロについては現像タンクと薬剤を持参、現地で現像して、ネガを日本に送ったこともある。貧乏隊のため、日本のフィルム会社から提供してもらった。日本を出て帰るまで約半年、防湿に気を遣ったが保管が完全でなく、そのためカラーは良くない。モノクロは比較的良く保存され、データベースとして役立ったことは嬉しい。



月に1度、村の男がチベット仏教徒、ボン教徒のふたつにわかれ、民家の屋上で談経や話し合い、喫茶をし、酒を飲む

大学院時代の指導教官であった故伊谷純一郎先生は、「スライドを見るの自分、写っていない周りの風景とか人とか、そのときの自分の感情とかまで蘇ってくる。や」とよくおっしゃっていました。わたしは二〇年ほどアフリカの熱帯森林で調査を続けてきて、写真もたくさん撮ったが、恥ずかしいことに、いつ撮ったのかさえずるには思い出せない写真が多い。フィルムド写真については撮影者と被写体のあいだの権力関係をめぐってさまざまな議論があるが、わたしは、自分の「立ち位置」を静かに語れるような一枚の写真を撮りたい。

## 撮影者の「立ち位置」

竹内 潔  
(たけうち きよし)

富山大学助教授



アフリカ、コンゴ共和国の熱帯森林で。網罟の合間に昼寝をする女子

二〇世紀が生んだ優れた報道写真家の一人、ロバートキャバが一九三〇年代のスペイン内戦取材して撮った写真のなかに、日差しを浴びながら寄り添って椅子に座っている民兵とその恋人とおぼしき女性の写真がある。写真を撮られることに對する含羞と二人で写ることの晴れがましさとといった日常的な感情が見る者に伝わってくる。同時に、共和国側に立った民

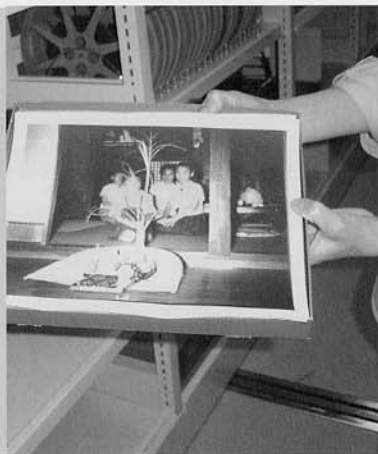
衆の内戦初期の高揚感が写真から静かに迫ってくる。そして、スペイン内戦の経緯を知る者にとっては、女性の胸に落ちている男性の銃の影は、その後の二人と共和国側の民衆の奇蹟な運命を暗示しているかのようだ。

報道写真が出来事や時代の瞬間を凝縮して表現するものであるのに対し、わたしはフィルムド・ワーカーが撮る写真は現地の人たちにとってみれば何ということもない日常を切りとって記録するものであって、両者の目的はまったく異なる。しかし、報道写真にせよ、フィルムド写真にせよ、見る者に迫る力を感じさせる写真は、一定の距離を置きながらも写っている人びとと撮影者が時間と場をしっかりと共有していることがわかるような写真だと思ふ。キャバの写真がわたしたちに衝撃を与えるのは、写し込まれた光景や運命のその現場に彼が実際に立っていたことが確実に伝わってくるからだ。事件であれ、あるいは「異文化」であれ、被写体の内側に踏み込んだ撮影者の「立ち位置」がわかる写真ほど、写真は「リアリティ」を描く。

## 写真とアウラ

久保 正敏  
(くほ まさとし)

本館文化資源研究センター



民博所蔵のプリント資料例

写真界の老舗、コニカミノルタ・グループが本年三月末でカメラとフィルム事業から撤退、というニュースは、光学フィルム対デジタル・メモリという蓄積メディア戦争の行方を示すものだった。さまざまなメディアの発達史は、これと同様、新興メディアと既存メディアとのあいだの進化論的なニツチ争いの歴史でもある。この事態に対し、フィルム擁護派、デジタル活

用派、それぞれからの意見が新聞などで紹介され、例えば赤瀬川原平氏は、フィルム撮影の作り出す思いがけない「回性の有り難みがデジタルにはない」と述べている。この世のある時間・ある場所・一回限り生じる現象や、この世に唯一存在するものに対し、人は特別な感情を抱く。一九三〇年代、文化社会学者W・ベイヤミンは、それを「アウラ(aura)」とよんだ。

印刷、写真、映画など機械的な大量複製技術は、情報のあいだにオリジナルとコピーという関係を作り出す。ベイヤミンは、風、香り、輝きを意味するこのラテン語(「オーラ」と同義を転用し、「回性やオリジナルのものもつ有り難みをアウラと定義した。発明当初、絵画、あるいは自然や風物の複製手段として出発した写真は、アウラを失わせるメディアだと非難される一方、それらを一般人に解放する役割をもつこととなった」と彼は言う。アナログデジタルをめぐる現代の議論にも、写真発明当時と同様の意見分布が見える。

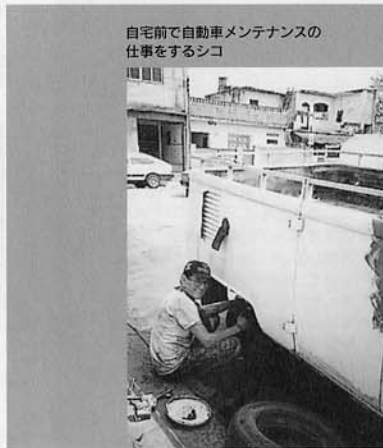
しかし、よく考えてみると、アナログ・メディアにするデジタル・メディアにする。その編集・再生過程でさまざまな変更や修正が可能だ。フィルムであっても、現象・焼きつけによって結果は個々異なる。そこで写真家のなかに、自分が撮ったフィルムではなく、自信作のプリントをオリジナルと見なして保存対象とする人もいる。

であるならば、どこにアウラを感じるかは、人それぞれ立場によって異なるのが当然だ。いや、人為的・機械的を問わず、何らかの操作の結果ではなく、個々の操作自体がすべて、アウラを生起するのかも知れない。と考えると、種々の蓄積メディア上に記録された写真資料のうち、どれをオリジナルとして保存すべきか、という民博の抱える宿題にまで、アウラの問題がかかわってくるようだ。

## スラムで生きる人

北森 絵里  
(きたもり えり)

天理大学助教授



自宅前で自動車メンテナンスの仕事をするシコ

現地調査では人に会って話すことが多い。わたしは、一五年前からブラジルの都市リオデジャネイロのスラムで調査をおこなってきたが、何人かの人は家族ぐるみの長いつきあいで、ここで紹介するシコはそのような友人の一人だ。

シコ(フランシスコ)が生まれたのは一九二九年、ブラジル北東部セアラ州の農村だった。若いころリオデジャネイロにやってきてスラムに住み、三〇歳くらいのとき、スラム・クリアランスに伴って建設された低所得者向け住宅地に移り住んだ。彼は、子供のころは畑仕事を、リオデジャネイロにきてからは左官やペンキ塗り、自動車修理などの仕事をこなしてきた。ずっと働き続けながら三〇年の住宅ローンを払い終わり、妻と子ども三人を養ってきた。彼は長年胃を患っており、二〇〇〇年四月に七〇歳の人生を終えた。

シコは胃から吐出して体調の悪い日以外は、日曜日も働いていた。わたしにとってシコはいつも「働いている人」だった。彼は「死ぬまで働く」と言っていた。リオ社会は貧富の格差が著しく、富裕層は低所得の人びとに対して「怠け者」として偏見をもったり、「貧しいが健気に生きる人」として理想化したりする。また、わたしは「働く」という「苦勞して稼ぐ」とか「仕事を生き甲斐にする」といったことを理想としてしまふ。シコはこうしたステレオタイプのイメージを払拭した。彼から「苦勞した」と「辛い」といった言葉は聞いたことがない。彼は自分のことを「貧しい」と言ったこともない。リオ社会全体から見れば彼は低所得者であり、彼もそのことを自覚している。しかし「貧しい」わけではない。彼によれば「貧しさ」とは広場で通行人からの施しを受けるように怠けて何もしないことであり、働くことは好きでも嫌いでもなく必要なことなのだ。

シコのような無名の人々がどのような人生を送り、それをどのようにとらえているのか。スラムで出会った人びとの話を聞くたびに、その人の思いがわたしの心に入り込み沈黙する。最後にシコに会ったのは一九九九年八月だった。写真を見るとわたしの心の中で、彼の思いが、いやわたしの彼の思いが動き出すのだ。

# 民族学とアートの融合

— パリの新しい博物館 ケ・ブランリー —

パリに新しい博物館  
ケ・ブランリーが誕生した。  
アートという視点からの  
展示を実現させたという  
この博物館をめぐる動きを追いながら、  
パリの博物館事情を探ってみよう。

大森 康宏 (おおもり やすひろ)  
本館民族文化研究部

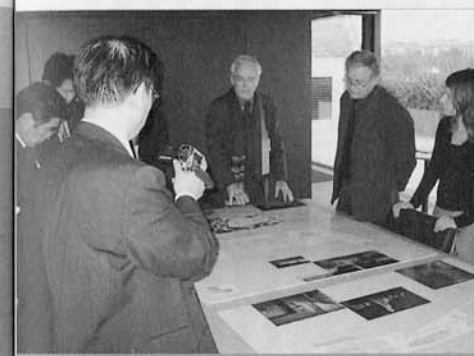
二〇〇六年六月三日、パリに新しい博物館が誕生した。その名は「ケ・ブランリー博物館」といってもほとんどの方が聞いたことがないのではなからうか。  
一九九五年フランス共和国の大統領選挙でジャック・シラクが当選すると、アフリカ、アジア、オセアニア、南北アメリカに関する芸術性の高いものや新しい美術品を展示する博物館の構想を打ち上げた。美術というからには、ほとんどアートに関係するものを展示す

所蔵品から選別した三五〇〇点あまりが移されることになった。  
これにともない、二〇〇四年暮れには、一部の展示をのぞき、両博物館とも展示場の大部分が縮小を余儀なくされた。それらの収蔵品は国の保管庫に収められ、新しい展示に向けて選別を待つこととなったのである。

## 民族・民俗展示のあゆみ

パリには二年ほど前まで民族学に関してふたつの博物館と、民俗学に関するひとつの博物館が一般に公開されていた。  
ひとつは、パリ東部のヴァンセンヌの森、動物園近くのポルト・ドレに一九三五年に「海外フランス博物館」として大きく建てられ、その後「アフリカ・オセアニア芸術博物館」となったものである。

初期の展示内容はフランス文学や美術における異国趣味、土着芸術、植民地領土についての博物館であった。当時のフランス植民地政策に役立ったとされている。  
一九六〇年代に植民地の独立が世界的に進むとアンドレ・マルローによって博物館の名称と内容も変更された。アフリカ・オセアニアの芸術工芸品や民族美術とされる資料などを中心に展示した。収蔵品に関して「人類博物館」の協力を得て整理されるはずであったが、十分に



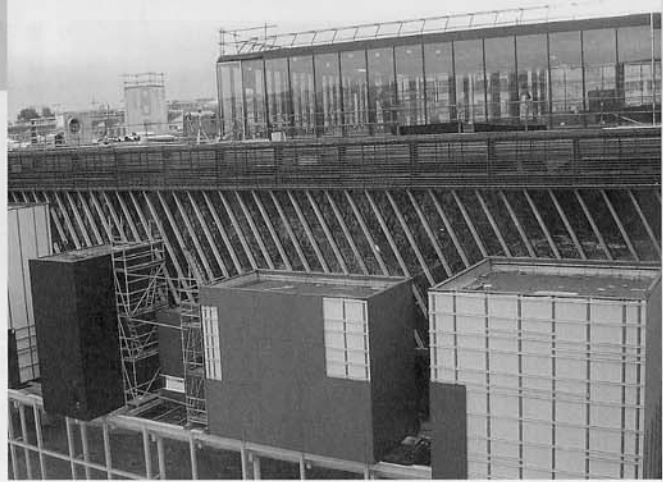
2005年10月、  
展示場についての説明を聞く



北西にある事務局の上から見たアメリカ展示場



植物につつまれた事務局の屋上



セーヌ河左岸の  
ケ・ブランリー通りに面した建物の北側

ると考えられて構想が練られた。そしてこの新博物館に、トロカテロのシャイヨ一宮にある「人類博物館」や、パリの東にある「アフリカ・オセアニア芸術博物館」などに収集されていた三〇万点以上の

実行されないまま新しい「ケ・ブランリー博物館」に入ってしまった。  
ふたつ目の博物館は、観光名所として知られるトロカテロの丘に立つシャイヨ一宮のなかの「人類博物館」である。その歴史は、一六三五年に、セーヌ左岸のオステルリツク駅近くの植物園内に「自然史博物館」として建築され、医学の実験と教育の場としてスタートしたことに始まる。一七三〇年代からは医学に自然科学、化学、物理学などが加えられた。そして二〇世紀に入って、万国博覧会のために建設されたシャイヨ一宮のなか、「旧民族誌博物館」の館長をしていた民族学者のポール・リウエが考古学、民族学の講座のために収集したものと「自然史博物館」の形質人類関連の収蔵品と一体化させ、一九三七年に「人類博物館」を構成した。

この「人類博物館」の展示は、形質人類学、考古学そして民族学という三つのコンセプトでできていた。しかし、それぞれの物質にあった保存と展示が一致していないなどの問題が残ってしまった。今回オープンした「ケ・ブランリー博物館」に統合されたのは、おもに民族学の資料である。ところが「人類博物館」には依然として、形質人類学の展示は居残って人類の発達史や人種学などの展示が続いている。何も展示されていないホール空間と人類誕生についてのわずかな展示は、来館者に統合の背後にある政治的

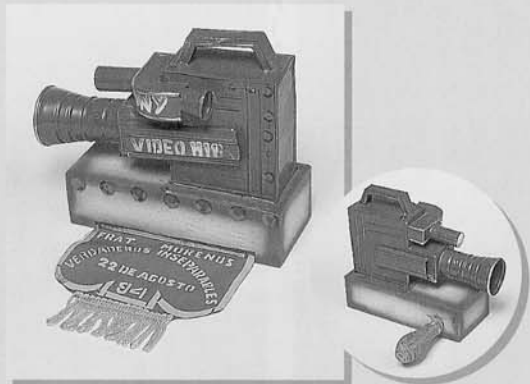
## 奇妙な楽器—マトラカ—

楽器(標本番号H196376、高さ/17.0cm 幅/20.0cm 奥行/16.0cm)

山本 紀夫 (やまもと のりお)

本館民族文化研究部

ラテンアメリカには奇妙な楽器が少なくない。ちよつと見たところ楽器とはとても思えないものも楽器として利用している。このマトラカもそんな楽器のひとつかもしれない。マトラカは、専門用語では擦奏楽器一般的には歯車のガラガラ(フチエット)として知られているものである。すなわち、歯車状に彫った木の軸を回転させ、それに薄い木片をひっかけてガラガラという音が出るようになっていた楽器である。しかし、これは、もともとはキリスト教の教会で使われていたものであり、しかも楽器としてではなく、教会の鐘のかわりの音を出す道具として使われていたらしい。キリスト教ではセマナ・サンタとよばれる聖週間の三日間は鐘が鳴らせないで、そのとき鐘のかわりにマトラカ



が使われていたのである。ところが、現在、ラテンアメリカではこのマトラカを楽器としてさかんに利用するところがある。なかでもボリビアのラパス地方ではマトラカの人気が大変なもので、黒人を模したモレーノという踊りにはマトラカが欠かせない。奇抜なマスクをつけ、派手なマントをまとった人物が数十人、ときには100人以上も多数の人がマトラカをガラツ、ガラツと鳴らしながら踊るのである。また、このラパスでは、マトラカの歯車部分を箱に入れ、その箱を共鳴体とするだけでなく、箱の上にはしばしば動物や植物、乗り物などをかたどったものを乗せる。写真はソニーのビデオカメラを飾りにしたマトラカ。

判された。リヴィエールのめざした民族の織り成すさまざまなモノ造りの展示とは、そのモノの有効性や活用目的に付加されている美的形態を展示によって引き出すことであった。こうして新しい博物館の名称は建築現場の住所名「ケ・フランシー」ということに落ち着いた。しかしかつてのように民族学的に比較できるモノの展示はなされないであろう。それは民族学自体が時代の流れに適さないことが指

な問題を感じさせるようだった。三つ目は、今回の「ケ・フランシー博物館」と直接関係ないものの、二一世紀に入って急速に研究も展示も不活発になり、二〇〇一年に閉館されたパリ西部のブローニュの森に建つ「民衆芸術・伝統博物館」(A・P)である。同館は、いわばフランス民俗博物館とでもいうべきもので、長きに渡る設置要請のち一九七五年にやつと開館されたのだが、その後わずか五年あまりで閉館されたことになる。この博物館は一九三七年に先の「人類博物館」のなかで、当時革新的な博物館作りに貢献していた民族学者のジヨルジュ・アンリ・リヴィエールがフランス中心のコレクションを集めて展示することをポール・リウエから依頼されたことに始まる。彼は展示紹介と保存をする博物館学委員の仕事と、収集品に関する国立科学研究センター(CNRS)の民族学者の研究とを連結させることにした。研究者と学芸員との連携・共同作業は、現実にはそれぞれの思わくどおりに進まず、資料の活用をめざした整備もつまく実施できなかったといわれている。リヴィエールが退任した後は展示の改良も進まず来館者も減少した。この博物館の特徴であった展示品の背景となる環境も展示されており、フランスの伝統的生活様式がひと目で理解できるめずらしいものであった。しかしレヴィエール



オーストラリアの民族画で飾られた事務所の廊下

ほとんどの民族資料がもち出された「人類博物館」に残された形質人類学の展示

コースを中心とする民族学的芸術理論に基づく展示の難しさは、一般大衆には遠ざけられてしまったようだった。

### 美学の視点をとり入れた展示

ポール・リウエのもとで「人類博物館」の副館長をしていたジヨルジュ・アンリ・リヴィエールは、民族学と美学の視点から収蔵品を選択して展示することを念頭においていた。したがって「人類博物館」からフランスの民俗資料を独立させて展示することを考え、ついに「民衆芸術・伝統博物館」の展示構想において物質文化そのままの展示ではなく、美的な視点からの展示を実現した。彼の人間からしてもそれは明らかであった。彼の組織する調査隊には、ミッシェル・レリス、レオ・フロベニウス、ジヨルジュ・バタイユなどが関係していたのだ。

こうした歴史的影響を受けてか、新しい「ケ・フランシー博物館」では、構想段階より美的な視点からの展示をしかけていた。それはアール・ブルミエと称するいわゆる原初的あるいは初期の芸術というものに焦点を当てようとしたこととあらわれている。しかもこれを博物館の名称にしようとしたことの噂もある。これにはたちまち多くの批判が浴びせられ、数年にして取り下げられた。そこで人類芸術文明博物館などの名称も考えられたが、いずれも適当ではないと批

摘されているからである。いったい誰の基準で、調査、研究、展示の対象とすべきものを判断するのか、西洋から見た民族観でよいのか、といった疑問が投げかけられているのである。二年近くも開館が遅れた背景には、歴代大統領の一大企画の実現に際して、人事、経費、そして何よりも政治的な状況が次々と変化する、フランス文化の特色が見えている。

時論
新論
理想論

## とうしょ 島嶼国の民主主義とストライキ

須藤 健一  
(すどう けんいち)

神戸大学教授



テントに賃上げ要求率とスローガンを掲げたストライキ会場



給料停止のスト参加者へ  
寄付された鶏卵の配給



顔に賃上げ率を書き、  
ストライキに参加する教員

一方、人口およそ一〇万人のトンガでは、昨年七月に五〇〇〇人の公務員が七週間におよぶストライキを決定した。トンガは、一八七五年に憲法を制定して近代国家の建設を進めた。その憲法は、わが国の明治憲法と同じ「欽定憲法」。現国王、ツボウ四世は「現人神」ではないが、元首、元帥、枢密院議長、司法・立法・行政の長を任命する。三〇名の国会議員のうち民選議員は九名、あとは王の指名。ツボウ王朝は王族・貴族・平民の身分制をして、表面上「平安な国家」を運営しているかに見える。

### トンガの公務員がストライキ

しかし、今年四月にソロモンの人びとが騒動を起こした。中国から経済支援（賄賂？）を受けた首相を辞任させ、中国人の企業や商店を襲撃したのである。この動きは、二〇〇〇年の土地と経済開発をめぐる島・民族間の対立とは様相を異にする。「外国からの不正」を糾弾するナシヨナリズム的な動きといえよう。

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。

二〇世紀末、インドネシアでは東ティモールやバブア州の独立紛争、フィジーのクーデター、そしてソロモンの民族対立があいついで起きてきた。これらは、独立運動と土地・資源・経済開発をめぐる住民の「不満」や「妬み」が民族の争いへと発展したものである。オーストラリアは、これらの地域を「オセアニアの不安定弧」とよび、平和維持軍を派遣するなど治安の回復に努力してきた。

### ソロモンでの外国糾弾

しかし、今年四月にソロモンの人びとが騒動を起こした。中国から経済支援（賄賂？）を受けた首相を辞任させ、中国人の企業や商店を襲撃したのである。この動きは、二〇〇〇年の土地と経済開発をめぐる島・民族間の対立とは様相を異にする。「外国からの不正」を糾弾するナシヨナリズム的な動きといえよう。

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。



## 「テヘランゼルス」のノルーズ

椿原 敦子  
(つばきはら あつこ)

大阪大学大学院人間科学研究科



無病息災を願って焚き火の上を飛びこえる  
年末行事



新年のパーティーで供えられた  
ハフト・スイーン



通り一面を人が埋め尽くす  
ノルーズの祭り

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。

オセアニアの島嶼国は、近代的な政治体制を導入し、かつて伝統首長の地位と役割を温存してきた。かつての首長は、現在の「民主主義」よりも「住民主体」の統治をしたといわれる。独立後、首長も国家エリートも、欧米の政治と「伝統の政治」との接合に苦心している。しかし、彼らの多くは、権力者としての「利権」を当然とみなす。と批判される。ソロモンとトンガの昨年来の出来事は、住民が権力者の「不正」や開発独裁をたたき、自分たちとの格差を是正するための新しい自己主張の兆しであるといえよう。





大学卒業式に卒業生たちと。  
左から2人目がラジャブザーデさん



教え子の  
結婚式にて



外交官時代。皇居にて



イランへの研修旅行で学生が、  
大学の図書館でラジャブザーデさんの  
著書を見つけた



## 外国人 と生きる

## ラジャブザーデさんの引越し

藤元 優子 (ふじもと ゆうこ)

大阪外国語大学助教授

### 日本人になったイラン人

ハーシエム・ラジャブザーデさんとわたしとの同僚としてのおつきあいは、もうかれこれ二〇年にもなる。外国語大学という職場の性格上、外国人の先生は数多くお見かけするが、彼ほど手のかららない人はほとんどいないだろう。大阪に赴任する前に、東京の大使館で四年、大学で二年半過ごしたので、日本語の日常会話には問題ない。独り身の身軽さもあってかフットワークが軽く、外交官時代の友人知己を含め、日本人との交友関係もわたしほどより何倍も広い。そのうえ、分厚い『日本史』をまとめたほか『徒然草』や『坊っちゃん』など、日本文学のベルシア語翻訳も出版しているほどの日本通である。日常生活の援助などほとんど必要ないどころか、例えば京都の古道具屋はたぶん踏破しているし、良質の和紙はどの店にある、などと教えていただいたりする。

わたしはよく学生に、「イラン人がみんなラジャブザーデ先生みたいだと思っている」と、イランに行つてびっくりするからね」と冗談めかして言う。彼の小柄な瘦身からは、几帳面、律儀、生真面目、勤勉、それに謙譲という美德のオーラが放たれている。約束厳守、研究一筋、休講皆無。イランやベルシア語について一言質問すれば、出典のコーヒーツきで詳細に答えてく

れる。さまざまな書類も本もどのように整理されているのか、必要とあればたちどころに出てくる。交渉事は粘り強くおこなって最後までやり遂げるが、自己顕示欲は強くない。十把一絡げの危険性は承知のうえで言わせてもらえば、彼は「イランらしくない」と言うより、これじやあまるで「昔の日本人の美点のオンパレードだ。彼自身、「あんまり長く日本にいたので、日本人になってしまいました」などと言ったりもする。

### 終の棲み家を北摂へ

そんなラジャブザーデさんが、来年三月の停年を前に、二〇年以上暮らした大学宿舍の小さなアパートを出て、北摂（大阪府北部）に家を買った。一九七九年のイスラム革命後、お上に召し上げられてしまった土地の対価を大統領に直訴してようやくとり返したお蔭とはいえ、ローンまで組んで臨んだ大きな買い物である。彼は何を思つて、家族も親戚もない大阪の新興住宅地に終の棲み家を求めたのだろうか。彼は奥ゆかしくてあまり自分の思いを語らないので、根掘り葉掘り聞いてみた。

ひとつは、理想の追求。イランと日本の文化交流に半生を捧げてきた者として、彼は自宅に私設図書館を作り、イランの

美術品も展示して、研究者や学生に提供したいと考えていた。実際、歴史や旅行記を中心とする五〇〇冊余りの蔵書は、個人蔵としては国内で稀有のコレクションである。将来的には、どこかの大学と契約を結んで、付属の研究所にもらえたら、と彼は願う。じつは過去に、古代ベルシアと縁のある奈良の明日香村に土地を求めようと動いた時期もあって、村長との面会も果たしたのだが、うまくいかなかった。そうでなくてもよそ者を受け入れにくい土地柄に加え、イランといえど怖いところという固定観念が植えつけられてしまつていてるのを感じたと言ふ。苦しい思い出である。

ふたつめは、引退後の生活の安寧。授業に縛られる生活から解放されて、研究に没頭したいが、イランは騒がし過ぎる。図書館兼ギャラリーの運営も問題が多いし、第一、友人知人とのつきあいに疲れるに違いない、と彼は思う。要するに、しがらみがない日本に軍配が上がったのである。

そして、日本への思い入れの強さ。四半世紀のあいだ日本で暮らして、日本社会の変化も目撃してきたが、「それでも日本人の誠実さ、忍耐強さ、礼儀正しさ、秩序正しさは、世界に類を見ない」と彼は言い切る。三年前、外国人登録の更新に行つた際、担当官に永住許可申請を勧められ、とんとん拍子に手続きが終つたことも、彼の背中を押した。

### 日本体験の正念場

こうして、大手ハウスメーカーと契約したものの、今年一月の完成までには紆余曲折があつたと思われる。凝り性だから、型にはまった製品を使いたがるメーカーとのあいだの溝を埋めるために苦労したそう。面倒な契約などには東京から日本人の友人が駆けつけ、イランからは妹さん親子がこだわりのタイル類など一〇〇キログラムもの荷物を運んできた。新居の扉を開ければ、床はベルシア絨毯の花圖、作りつけの書架にはベルシア語の本が並べられているが、天井には日本の古い灯りが吊るされ、部屋の隅の行灯には、ベルシア書道で古典詩が書かれた和紙が貼られている。家の契約から造作・装飾まで、まさに日伊の合作、折衷の賜物なのだ。

もしかすると、これだから彼の「日本体験」の正念場なのかもしれない、とわたしは思う。外国人恩給生活者に、ローンは税金は、保険料は、重くのしかからないか。人間関係の希薄なニュータウンで孤立してしまわないか。心配は尽きない。どうか前庭に植えたシンボルツリーの柘榴の木が豊かな実をつけ、千客万来の「ベルシア文庫」がイラン研究者のオアシスになりましよう。



モパン人の家で衣服や  
日常用品を求め  
(ペリーズのサン・アントニオ村)



お菓子やたばこが売られている  
ガリフナ人の店  
(ペリーズのホブキンス村)

ガリフナの資料を  
探しているのを聞きつけて、  
村人たちが物をもって  
集まってきた  
(ペリーズのホブキンス村)



一晩の豪雨のあと、冠水した道路  
(ペリーズのプンタ・ゴルダ近郊)



## 物は町に、情報は村に —反比例の関係—

### 地球を 集める

八杉 佳穂  
(やすぎ よしほ)

本館民族文化研究部



メキシコ大地震  
(1985年)  
写真提供: アフロ



### メキシコ大地震に遭遇

たくさんのお金をもって、たくさんのお品物を買って、安全に日本まで輸送するという作業は、日々の研究生活とはおおよそかけ離れた行為である。だから問題なくことを運ぼうと思っただけで、たい無理な話である。それにもかかわらず、中米の民族資料の充実を図るために、わたしは収集を、それも懲りもせず、三回もおこなった。幸い現地での多くの人の協力のおかげで、無事に収集をおこなうことができたが、地震があったり、大雨にあつたり、車がエンストしたり、小さなトラブルは数え切れない。

地球が活発期に入ったのか、グアテマラやメキシコでも大きな地震が起きている。なかでも一九八五年九月一九日の朝に起こったメキシコ大地震は忘れがたい。ゆるやかな揺れがなかなか止まらない。地震には慣れっこになっているので、地震が起きたときにはベッドの下や机の下に隠れるとかいつていたなどのんきに構えているうちに、戸は開く、天井や壁がバラバラ落ちてくる。どうもふつうの地震とは違う。さすがにこれはやはりと思い、ホテルの六階から瓦礫だらけとなった階段をあわてて降りた。町に出てみると、ビルが至るところで崩壊している。二〇日近く収集した物を倉庫を借りて入れていたが、その一帯はひどい被害で、すぐさま立ち入り禁止になってしまい、近づけない。どうしようもないので、先にグアテマラの収集をおこなうべく、メキシコ

をあとにした。幸い倉庫も品物も無事であったが、倉庫が潰れていたら、違うホテルに泊まっていたら、と思うと、今さらながら運の良さを感じる。

### ペリーズでは大雨に立ち往生

一九九三年に行つたペリーズでは、なぜかトラブル続きであった。南に住むモパン人の町サン・アントニオをたずねるために、ペリーズ市でジープを借りて出発したとたん、エンジンの調子が悪く、引き返さざるをえなくなった。時間をロスしないよう、車を換えてもらい、すぐ再出発した。ところが今度は途中でバンクである。これはよくあることで、レンチを出してタイヤを交換しようとしたところ、レンチが摩耗していて、困つたことにポルトがはずれない。ペリーズは近畿五府県を足したほどの面積に、たつた二〇万人ほどしか住人がいない。だからペリーズ市を出ると、ほとんど人に会うことがない。二時間経つても、三時間経つても、車は一台もとらぬ。どうしようもないので、覚悟を決めて野宿するしかないかと考え始めた矢先、幸運の女神が一台のジープをよこした。事情を話し、レンチを借りるとなんとびつたり合つてはいないか。次の町で、バンクを修理して、ガリフナ人の資料を集めた後、目的地のプンタ・ゴルダに着いたのは、夜中であつた。

次の日、サン・アントニオに行き、モパン人の家をたずね歩いたが、どこも留守。やつには山刀姿の男たちをよく見かける。女たちはという、頭に風呂敷包みを寄せ、背に子どもを背負つた姿が一般的である。おそらくもち歩いている物は大切な家財道具一式である。だから村に収集に行くとき、使われている状況や物についての情報は確かに集まるが、苦勞して村に行つたわりには、物は少ししか集まらない。たくさん物を集めようと思うと、町にかざるが、物の情報はそれに反比例する。

最近の博物館や美術館は、休憩スペースがふんだんにとつてあつて、ゆつたりしている。それに引き替え、民博の展示場では、物がところ狭しと並んでいる。日本が元気のいいときに展示されたため、休憩スペースなど考えもしなかつた。収集も、展示を充実させるために、まずは基本的な物をできるだけたくさん集めることが必要であつた。

外国のあるチームが一年かけて土器を丹念に収集したという本を手にし、羨望に駆られたことがある。わたしの収集はそれとは対極的な収集であつた。基本的な資料が集まった現在、半年とか一年をかけて、じっくりとデータを集めながら収集をすることが望ましい。そんな提案を何年も前にしたのであるが、実現していない。効率とか成果とかが優先され、まだまだゆつたりした考えが浸透してない。それはまだ日本が元気のいい証拠なのであろうか。

### データを集めながら収集を

祭りや市が立つ日には、風呂敷に物を

包んで背負い、片手にはラジオ、もう一方

できたてのトルティーヤほどおいしいものはない



コパン遺跡の石碑(8世紀)。トゥモロコシの神の装束をまとう13代目王



コパン遺跡の石碑(7世紀)の前で妻と長女



マヤ系先住民の発掘作業員と一緒に。発掘現場を離れると、トゥモロコシ畑で働く農民である



9月15日の独立記念日。「ミス・コパン県」に選ばれたメスティソ(先住民と白人の混血)の女の子

### トゥモロコシ (学名: *Zea Mays*)

メキシコ原産のイネ科の一年草で、世界三大穀物のひとつ。イネ科の野生植物テオシンテ(1本の穂に6~10粒の種子をつける)が、採集利用された過程で突然変異してトゥモロコシの先祖になった、という説が有力。メキシコ高地のテワカン盆地にあるコシユカトラン岩陰遺跡から出土した最古のトゥモロコシ遺存体(前5000年頃)は、穂軸の長さがわずかに2センチメートルほどの小さなもので、穀粒は平均55粒であった。モンゴロイドの先住民たちが、数千年にわたって品種改良を重ねた結果、現在では何枚もの苞葉に包まれ穂軸に数百の穀粒をつけるものとなり、人の手なしには生存できない植物になっている。



## トゥモロコシから生まれたマヤ文明

青山 和夫  
(あおやま かずお)

茨城大学教授

### マヤ文明の原動力のひとつ

わたしは、中米のホンジュラスで一〇年間マヤ文明の調査に従事した。主食は、何といてもトゥモロコシである。トゥモロコシは、乾燥・貯蔵が容易であり、その余剰生産は、マヤ文明を生み出した原動力のひとつであった。日本の天皇が稲作の儀礼に深くかかわってきたのと同様に、トゥモロコシは、古代マヤの王権や精神世界においても重要であった。古代マヤの王は、宗教儀礼においてトゥモロコシの神をはじめ、さまざまな神の仮面・衣装・装飾品を着用して、しばしば神の役割を果たした。古代マヤの東西南北の色は、それぞれ、赤、黒、黄、白で古代中国の概念と酷似するが、マヤの場合は四種類のトゥモロコシの色に対応した。トゥモロコシは、スペイン人が一六世紀に侵略した後も、現在に至るまで中米の主作物である。ホンジュラスにあるマヤ文明の大都市遺跡コパン(ユネスコ世界遺産)でも、発掘作業員兼農民のマヤ系先住民の話題の中心は、トゥモロコシの発育状況とサッカーである。

### できたてトルティーヤのおいしさ

ホンジュラスは、わたしの妻ビルマと長女さくらが生まれた国である。トゥモロコシを製粉して、さまざまな料理を作るのが一般的である(日本と同様に、トゥモロコシをそのままゆでたり、炭火で焼いて食べることもある)。食用の石灰水に一晩漬けたトゥモロコシの粒を、伝統的な調理法では、製粉用の石盤メタテと紡錘形の石棒マノを使って挽き潰し、マサとよばれる練り粉の玉を作る。そこから必要量をとり、薄く平たい円形にして、土製板や鉄板の上で焼いたのが、トルティーヤで

ある。挽き立ての練り粉で手作りした分厚く、ほかほかのトルティーヤほどおいしいものはないといつも思う。首都のテグシガルバ市でも、昼時になると、できたてのトルティーヤを大きな籠に入れた女性が、「トルティーヤはいりませんか! できたてだよ! わたしのトルティーヤはもっと大きいよ」と大声で叫びながら家々を回っていく光景が見られる。

### 多様でハイブリッドな料理法

トルティーヤが広まる以前のマヤ文明では、トゥモロコシはトゥモロコシの粉を水にとかして飲むポツレやアトレ、蒸し団子のタマルとして食用されていた。一六世紀以降に旧大陸起源の食材を取り入れた現代のタマルは、ハイブリッドな食文化を反映する。マサを砂糖や塩で味つけてトゥモロコシの苞葉で包んで蒸した小型タマルのタマリート・テ・エロテや、鶏や豚の肉をマサでくるみトゥモロコシの苞葉で包んで蒸したモントゥーカ、マサのなかに鶏や豚の肉を入れてフランテン・バナナの葉に包んで蒸したタマル、そしてホンジュラスの「タマルの王様」といえる、クリスマスに欠かせない大型のナカタマルなどがある。

トルティーヤは、タコ(複数形はタコ)の皮でもある。ホンジュラスのタコスは、鶏肉か牛肉に、みじん切りにしたジャガイモやタマネギを加えて炒めトルティーヤで巻き、油で揚げるのが特徴である。ぱりぱりとした食感で、ビールつまみにも合う。トルティーヤにチーズを挟んで焼いたクサティエーヤや、マサにチーズを加えてドーナツ型にしてオープンで焼いたロスキーヤは、朝食やおやつとして好まれる。



## ビルマで歌を学ぶ

井上 さゆり (いのうえ さゆり)

日本学術振興会特別研究員  
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

### 教えたくなるまで待つ

ビルマの文化大学は、ヤンゴン市内の人もほとんど訪れないような郊外にある。建物と人が密集したヤンゴン市の中心部の方がまだ緑が多いと感じるくらい木が少なく、雨季にはぬかるみに、他の季節には埃と日差しが強さに悩まされた。大学の校舎は二棟でさほど大きくない。しかし敷地自体は広く、敷や

### お漏らしを誘う迷唱

先生の唯一の孫である長女の息子は、当時四歳だった。生まれてすぐにかかった高熱のために麻痺が残り、ことばが話せず寝たきりだった。家族全員からとても可愛がられていた。愛くるしくいつも笑っている。わたしのことを気に入ってくれたようで、行くところをほこらせて喜んでくれた。そのうち、わたしが歌い始めると必ず小便をするようになった。ビルマでは、ぶつオムツは使用せず、そのまま垂れ流しである。先生の膝の上で抱かれていればそこに流れる。わたしが先生の歌を真似て歌い始めてしばらくすると、その子が小便をする。先生の膝の上で笑った場合は「わっ」と言いながらも笑って着替えに行く。床にした場合も、その子の着替えをしなければならぬ。そんなことで、しばしばレッスンを中断する。ふだんはあまり小便をしなくて困っていたそうであるが、わたしが歌うと三回くらい同じことが繰り返される。わたしはすっかりその子の小便係として絶大な信頼を置かれるようになった。

その子は話せないが、言われることは理解していた。わたしの歌が下手なため、先生がわざとその子の前で「こんなできないなんて、インインエー(わたしの名を叩いてやる)」と言ったり、実際にわたし



文化大学の校舎から見た敷地。ほつりほつりと建っているのは教職員の住居



大学内の食堂で、毎日、紅茶を飲みながらおしゃべりをする



中央の小屋は大学の食堂



豎琴の教室

豎琴の授業。先生が弾いたものを真似して覚えていく



のお尻を叩いたりすると、目にいっぱい涙を浮かべて悲しい顔をして泣き始める。自分はいくら怒られても、軽く叩かれたりしてもニコニコしているのに、他の人が意地悪されたり嫌な目にあったりしていると泣き出すと言う。先生が「大丈夫、叩かないよ」と言っていると安心して

泣き止む。小さな子を泣かせるまでからかうのにもびつくりしたが、その子の優しさが心に響いた。二年間の留学を終え帰国して一年後、その子が亡くなったと聞いた。それから二年ほどして訪ねたら、一歳になるそっくりの男の子がいた。その後生ま

れた先生の孫だと言う。健康に育ち、よちよち歩きをしていた。皆が、あの子の生まれ変わりと聞いた。あの子そっくりの利発そうな表情と優しい笑顔に、わたしもそう思った。

沼も広がっている。そして、一部の教職員が住むために建てられた家もある。わたしの歌の先生の家も、そのうちのひとつであった。

大学のカリキュラムを消化するには授業では足りず、多くの学生が同じ教師にプライベートでも教えを請う。わたしは一九九九年から二〇〇一年のあいだ唯一の留学生だった。授業はビルマ人学生とは別に個人で受けていたが、それでも授業時間だ

けでは足りず、数名の先生に交渉してプライベートでも教わることにした。四時に授業が終わる、歌の先生の気がむきさえすれば、家に来いと言われる。しかし、その前に、大学内の食堂で先生と一緒に紅茶を飲んだり、そこに他の人が加わっておしゃべりが始まったり、先生が教えたくなるまで待つのがふつうである。

### 師と家族ぐるみのつきあい

ビルマの古典音楽は、楽譜を用いず口承で伝えられる。古典音楽とはすなわち歌謡である。有名な豎琴をはじめとして楽器は、歌とともに奏されるためである。そのため、歌手も楽器奏者もまず歌を覚える必要がある。歌を学ぶ者も、楽器の奏法を学ぶ者も、先生が「フレーズずつ演奏して聞かせる曲を真似して覚えていく。完全に暗記し、考えなくても口や手が動くようになるまで練習を重ねる。わたしの教師たちも、最初はそのまま師の家に住み込んで雑用をしたり、一緒に演奏活動について行ったり、とにかく師とともに過ごすことで、曲や演奏技術を学んできた。師とは自然、家族ぐるみのつきあいとなる。こうして師から知識を授かって、それが自分の財産となる。

ビルマの古典音楽の歌唱を学ぶには、歌詞だけが記された歌謡集が教科書である

。歌詞をそれに頼りながら、先生が歌って聞かせる各フレーズをすぐに繰り返して間違えれば直される。その繰り返しで旋律と歌唱法を覚える。同じ旋律が他の作品に用いられている場合も多いので、きちんと覚えていないと、いつのまにか他の作品を歌い始めていたりする。大学では毎日一時間ほど歌のレッスンを受けていたが、一度は覚えても次の日になると忘れていくことも多く、とにかく先生に密着して訓練してもらうしかない。わたしは歌と豎琴を大学で学んでおり、土日に豎琴のプライベート・レッスンを受け、平日の放課後はほとんど歌の先生の家に住んでいた。

先生は五〇歳前後の女性で踊りも教えており、いつも綺麗にお化粧をし、きちんと身だしなみを整えていた。家族構成は、ご主人と高校生の息子一人、小学生の娘一人、結婚した長女とその夫と子どもであった。歌の先生の家では、ビニールのシートを敷いた木の床に、小さなちゃぶ台を置き、先生と対面してレッスンを受けた。スイーという小さいシンバルとワーというカステネットを両手にもってリズムをとりながら歌う。スイーとワーの打ち方、順番は、歌ごとに決まっているので、これも覚えなければならぬ。ちゃぶ台の上においた歌謡集にスイーとワーの箇所をメモしながら練習する。

## 編集後記

昨年沖縄を訪ねたとき、ある博物館の戦前の歴史に関する展示室で、1枚の懐かしい写真に再会した。その写真とは、東北地方のある農村で、紺の綿入れを着た3人の子どもが生の大根をかじっている写真である。この写真、今は知らないが、むかしは歴史の教科書の常連であり、戦前の日本、とくに昭和恐慌のころ、日々の食事にも事欠いた(という)東北地方の農村地帯の貧しさを説明する際には必ずとっていいほど登場した。

ところが、あらためてこの写真を見て、素朴な疑問を感じた。この子どもたちはなぜ大根を煮て食べなかったのだろうか。煮れば立派なおかずになって、おいしく食べられ、少しは空腹も満たされただろうに。ひよっとしたらこれは、今風にいえば「ヤラセ」だったのではないか…。

正直に告白すると、長いあいだずっと、わたしのなかでは東北といえはあの写真だった。1枚の写真がもつ語りの力の恐ろしさを思わずにはいられない。語りとは、もちろん同時に騙りでもある。

真実を写す、写真ということばも、こうしてみると一面罪深いものがある。

(川口幸也)